

透光の樹

2004(平成16)年11月27日鑑賞(心齋橋パラダイスクエア)

★★★★



監督＝根岸吉太郎／出演＝秋吉久美子／永島敏行／高橋昌也／平田満／寺田農／田山涼成
(シネカノン配給／2004年日本映画／121分)

……韓国では『冬ソナ』、日本では『セカチュー』と、今や「純愛モノ」が大はやり。しかし50歳になっても「官能モノ」(?)に出演できる、私の大好きな女優秋吉久美子が主演する大人の恋愛ドラマも魅力たっぷり。舞台となる素敵な金沢のまちを楽しみ、さらに日活ロマンポルノばり(?)のベッドシーンを存分に楽しもう。とりわけ団塊世代のオッサンたちには超お薦め作だ!

ヒロインはあの秋吉久美子!

この映画のヒロイン山崎千桐^{ちぎり}を演じるのは、私が大学時代から大好きだった秋吉久美子。彼女の映画での主演は久しぶり。しかも大人の恋愛劇、エロス満点映画(?)での主演だから、何が何でも観なければと勇んで出かけていった。1973年の『十六歳の戦争』でデビューし、1974年の『赤ちょうちん』で鮮烈なイメージをうえつけた秋吉久美子は、当時ちょうど20歳。そして、時代は学園紛争まっ盛りで、映画は日活ロマンポルノ全盛だった。

フォークグループ「かぐや姫」のメンバーである南こうせつは今も大活躍だが、この「かぐや姫」が歌って大ヒットした『赤ちょうちん』の映画化が企画され、その新人女優として白羽の矢がたったのが秋吉久美子。玉子顔で白痴美(?)、そしてどことなくけだるそうで非現実的なイメージ(?)の彼女はこの時代にピッタリのパーソナリティで大人気となった。

同じ年に矢継ぎ早に出演したのが、『妹』と『バージンブルース』だが、このすべてが私の大好きな映画。

■坂和弁護士の1番好きな女優は？

私は弁護士になってからもずっと、例えば飲み屋で話が盛り上がり、「坂和さんの1番好きな女優は？」と聞かれた時は、いつも「秋吉久美子」と即答していた。そして私の頭の中で、この秋吉久美子と同じようなイメージの女優はあと風吹ジュンと藤谷美和子の2人。もちろんその後、松嶋菜々子、黒木瞳など私の好み(?)は次々と広がり、結構浮気(?)をしているが、今でも秋吉久美子が私の一番好きな女優。そんな秋吉久美子が50歳となった今、再びあの特徴のあるしゃべりとあの美しい肢体を見せてくれるのだから……。ちなみに、この映画発表を機に『週刊現代』(2004年10月16日号)がとりあげた、「秋吉久美子『美しいボディ伝説』」は私のお宝……。やっぱりオレはスケベ親父だネェ……。

■原作は？ そして監督は？

この映画の原作は、高樹のぶ子の同名小説で、谷崎潤一郎賞を受賞した恋愛小説(官能小説?)。主人公となるのは、25年ぶりに再会した山崎千桐と今井郷(永島敏行)の2人。この映画の宣伝用のキャッチコピーとして使われているセリフ「『私を買ってください』——その言葉が永遠の愛の始まりだった……」は、よく考えると実にショッキングなもの。こんな原作をもとにこの映画を監督したのは根岸吉太郎監督。6年前に監督した『絆—きずな—』(98年)は役所広司・渡辺謙を中心とした男のドラマだったが、今回は一転して大人の「純愛モノ(官能モノ?)」に挑戦……。根岸監督の『ひとひらの雪』(85年)は、渡辺淳一の官能文学(?)をもとに秋吉久美子を起用した津川雅彦との絶妙の「官能ドラマ」だったが、その夢を再びこの作品で……。

■景観法の制定に注目！

2004年6月わが国ではじめて「良好な景観の形成の促進」を目的とする景観法が制定された。その一部は今年12月までに施行され、残りの部分は来年6月までに施行されることになっており、その活用が大いに注目されている。

この景観法の制定は、一方では近時の景観意識の高まりや国立マンション事件

をはじめとする景観判例の広がりを受けたもの。しかし他方では、国土交通省が2003年7月に公表した「美しい国づくり政策大綱」によって、美しい国づくりに向けて大きく舵を切ることを宣言し、さらに同年12月には、観光立国関係閣僚会議が「観光立国行動計画」を決定したことにみられるように、美しい景観の形成は国際競争力をとり戻すために「観光立国ニッポン」が必要不可欠であると国・政府が認識したものを示すものだ。この法律を生かすも殺すも今後の市町村を中心とした地方自治体による「条例制定」についての努力とその能力如何にかかることになる。下記に掲げた2004年9月22日の新聞記事は、景観法の意義とその活用について私の視点を述べたもの。弁護士として真面目に勉強している私の姿も是非知ってもらいたいものだ。

金沢市長の国会での意見陳述にも注目！

注目すべきは、この景観法の国会での委員会審議において、金沢市長の山出保氏が、西村幸夫氏、中林浩氏という学識経験者（大学教授）とともに参考人として意見陳述をしたこと。すなわち山出氏はこの参考陳述において、「①良好な景観の保全・形成のためには、建築物の単体規制ではなく、景観の統一的な『整序の論理』による規制が必要であること、②これまでの都市計画法や建築基準法による規制は非常にわかりにくく限界があったこと、③法案成立後には、地方、特に市町村のこれまでの取組みが最大限尊重される運用がなされるよう政令や運用指針が作成されること」を強く要望している。以上景観法についての詳細は、私が書いた『Q & A わかりやすい景観法の解説』（2004年・新日本法規）を参照してもらいたい。

ステキな金沢のまち——その1

五木寛之の『内灘夫人』は文学青年だった（？）学生時代の私の愛読書。彼の代表作は何といっても『青春の門』だが、初期の作品は『デラシネの歌』や『青年は荒野をめざす』等。そしてその1つとして『内灘夫人』という作品があった。この小説は、金沢から北陸鉄道の浅野川線で約20分ほど北西にいったところにある海岸沿いのまち内灘町（村）が舞台。ここはかつて米軍の砲弾試射場として使

用されていたが、それに対して地元住民が反対運動をおこし、いわゆる「内灘闘争」と呼ばれる反米基地闘争を闘ったところ。この内灘を舞台として展開される学生運動家沢木良平とその妻となる霧子との学生恋愛がこの小説の出発点。学生運動とともに闘った2人だったが、時代は変わり……？ 「内灘」にこだわる霧子と現実社会に適応してしまった良平との間に生まれた溝は……？

こんなストーリーにあこがれた私は18歳の時の大晦日、1人内灘の浜辺に立ち、その砂浜に刻んだ大きな文字は……？ これ以上具体的に私の失恋体験を書くことはできないが、金沢といえば、私にとってはこの内灘の浜辺を思い出してしまう思い出のまち……。

ステキな金沢のまち——その2

私が大阪弁護士会に登録したのは1974（昭和49）年4月。当時は、交通事故をめぐる訴訟が多発していたところ、私が入所した事務所ではこの交通事故をめぐる訴訟事件がたくさんあった。そのため私は三重県方面、石川県方面さらには長野県の山奥の裁判所までよく出張していた。今では民事訴訟法の改正によって、「弁論準備手続」が創設され、また「電話会議」という便利な制度ができたため、遠方の裁判所への出張は減ったが、当時は口頭弁論主義、公開の法廷という訴訟の原則を貫くためには、どうしても弁護士が裁判所に出向いていく必要があったわけだ。

もっとも、弁護士になりたての私にとっては、とりあえず形式的に（？）法廷に立ち、一定の手続をすませばいいだけの地方出張は半分がお楽しみの場合……？ ましてや、一泊の出張で金沢や富山に行くことになれば、それは90%以上がお楽しみ。そんな「出張」で何回も訪れた金沢のまちは本当にしっとりとしたすばらしいまち。兼六園などの公式的な見物場所はもちろんすばらしいが、その他にもいろいろな穴場（？）が……？

この映画にみる金沢のまちの3つのすばらしさ！

おっと、自分の体験談ばかりを書いていたが、この映画では金沢のまちのすばらしさがいっぱい！ その第1は、原作の舞台となった鶴来（つるぎ）とい

うまち。ここは、料亭での宴席のシーンでうまく紹介されるが、今井郷が昔の記憶をたどりながらタクシーで金沢のまちを巡っていくシーンは、観ているだけで心からウキウキしてしまうもの。詳しい地理はわからなくとも、まさに「古都」金沢のたたずまいと雰囲気があるままスクリーンから伝わってくるようだ。

第2にすばらしいのは、千桐と郷の2人の「逢瀬」のたびに登場する「旅館」。男女がセックスするだけの場所を提供するいわゆるラブホテルや、本来はそうではないけれども時としてその目的のために使用される高級シティホテルはたしかに便利なもの(?)だが、それを利用したのでは、とてもこの映画のような大人の官能ドラマは生まれてこない。

第3の見どころは食事。貧乏育ちの私は、どちらかという、純日本風の本格的な懐石料理が絶対いいと思っているわけではない。むしろ若い時は、あの一品ずつゆっくりと出されてくるのがまどろっこしく、てっちり鍋をつついたり、焼き肉を好きなだけ自分の箸でとる方が好みにあっていたものだ。それは今でも基本的に変わらないものの、やはり年のせい、野菜・魚を中心とした和食好みになってきていることはたしか……? そんな今の私の年齢や立場で、この映画に登場してくる金沢の旅館や千桐が働くことになった寿司屋で提供される料理をみると、それはすごく魅力的!

私が何回も見た、兼六園の美しさ、特に雪に埋もれたその美しさそしてその他さまざまな思い出をたどりながらこの映画を観ていると、金沢というまちのすばらしさを十分に堪能することができる。

誰か書いてほしい、女優秋吉久美子論

この映画での秋吉久美子の官能ぶりにはあらためてビックリしたが、この映画を観て私なりに再認識したのが、女優秋吉久美子のしゃべり方! これにはものすごい特徴がある。その特徴は、私流の表現では「つけんどん」「断定的」「言い放し」など。これは裏からいうと、説明不十分、不親切、えらそうということかも……? しゃべり方に大きな特徴のあるもう1人の女優は何といっても桃井かおり。彼女の特徴は「アンニュイ」つまり、気だるさ、語尾あがり、曖昧……で、秋吉久美子のしゃべりとは全く異質のもの。しかし両者に共通しているのは、

自分のしゃべっていることへの確信や頑固さ等であり、その共通のキーワードは2人とも男性的だということだろう。

要するに、2人ともDNA鑑定をしてみると姿形はオンナだが、精神構造はオトコなのかもしれない。

来年1月に公開される『北の零年』に主演する吉永小百合は、もちろん私も大好きで昔からのファンだが、これは長嶋茂雄、大鵬、石原裕次郎、美空ひばり的な、どこにも欠点のない（欠点を見せない）国民的大スターとしての人気。吉永小百合がヌードを見せるということで大きな話題を呼んだ昔の『潮騒』（64年）も話題だけで、要するに国民的スターとしては、絶対的に線を越えてはならないタブーがあるわけだ。

しかし秋吉久美子はそうではない。自分が好きなように生き、好きなように演じるという価値観や人生観がきわめてはっきりしていると私は考えている。私にはこれ以上の分析は到底できないが、是非その道の専門家に、50歳の今でも光り輝き、見事なヌード姿や官能シーンを堂々と見せる「女優秋吉久美子論」を書いてもらいたいものだ。

その意味ではパンフレットの中にある、秋本鉄次氏の「真の“大人の恋愛映画”の傑作における真の“大人の女優”＝秋吉久美子の魅力」という小稿はきわめて興味深い1つの秋吉久美子論。もっともっと取材を重ね、これをさらに膨らませてもらいたいものだ。

永島敏行を見るのも久しぶり！

この『透光の樹』を完成させるまでには5年もかかったということらしい。したがってそこには、今井郷の役で当初出演していた萩原健一が途中降板をしたことを含めて、さまざまなトラブルがあったことは明らか。

しかし、何でもスナナリいくことだけがいいわけではなく、回り道をしながら進んだ方がよりよいこともある。その最大のポイントは男性の主役が萩原健一から永島敏行に変更されたこと。萩原健一では何となくヤクザっぽいイメージ（？）が強いが、永島敏行は私のイメージでは生真面目な青年そのもの。それは、私が彼のデビュー作である『サード』（78年）は観ていないものの、その後が続

く彼の若い時期の作品である、『十八歳、海へ』（79年）、『英霊たちの応援歌』（79年）、『動乱』（80年）、『二百三高地』（80年）、『連合艦隊』（81年）等を観ているからだろう。これらはそのほとんどすべての役が純真で一筋に前に向かって突き進んでいく青年の役だった。

永島敏行は1956年生まれだから、この1980年ごろはまさに25歳前後の青年時代。しかし彼も今や50歳近くになっているわけだ。

こんな男の価値観、わかるかな？

この映画では永島敏行は東京の映像会社の社長で、10名弱の社員を養いながら忙しい生活をしている典型的な都会の「仕事人間」。したがって家庭のことは奥さんまかせだし、浮気は仕事がらみ(?)で日常茶飯事(?)のこと。だから「不良亭主」であることは明らか。しかし、大腸ガンになっていることがわかって、ここまで好き勝手なことををやってきたのだからと自ら納得するだけの潔さがある。そのうえ、その手術をして男性機能を失うくらいなら、「少しくらい」生命を長らえるよりもできるところまで千桐とセックスをして死んだ方がマシという価値観（女性からみれば何とツマらない価値観と思うかもしれないが……）をもった、ある意味単純で一途な男。しかし私に言わせればそんな男だからこそ、自分の寿命をさとした後は、会社の次の代表者選びについて実にきっちりとした処置をしているし、「また来てくれますね、約束してください！」と迫る千桐に対して、「無茶を言うなよ」と正直に答えて、「カラ手形」は発行していない。実に誠実な人間だと思う。

映像の世界で生き、キレイなこともキタナイこともすべて見て、それを現実として受け入れながら、ちゃんと会社を維持してきたという意味では、郷の血液型はB型かもしれないが、千桐との対応や代表者指名の手際をみていると完全にA型だと私はみだが……？

「援助交際」の可否と学ぶべき大人の恋愛テクニク！

この映画のキャッチコピーである「私を買ってください」だけを見ると、「援助交際」の大人版、熟年版かと思われてしまいそうだが、それは完全な誤解！

このセリフは、たまたま鶴来の町で千桐と会いその実情を知った郷が、少し酒に酔って（酒の酔いを借りなければ言えないということもご理解のほどを……）千桐に電話をした時のもの。この電話は、途中で千桐が突然受話器を置くことによって切れてしまったが、その後は千桐からのハガキがポイント。そこには「平泉寺のカタクリの花をお見せしたいと思います」と書かれてあった……。

借金を抱え、寝たきりになっている父火峯（高橋昌也）の介護をしながら、娘の眉（仲村瑠璃亜）と3人で暮らしている千桐がお金に困っていることはまちがいない事実。25年前、六郎杉と呼ばれる大きな杉の木の枝の上に座った、高校生だった千桐のセーラー服姿を忘れられない郷が、こんな千桐と再会した時に思うことは……？

私は「援助交際」という言葉や概念自体は否定されるものでもないし、非道徳的なものでもないと確信している。こんなことを弁護士の私が書くとあちこちから攻撃されそうなので、詳しく展開することはやめるが、私が言いたいことは、いい「援助交際」、理想的な「援助交際」もありうるということ……？

そして、この高樹のぶ子の原作や根岸吉太郎監督がこの映画で表現したかった客観的にこんな状況にある男女の究極の愛とは……？ 40歳までの男女はともかく、40歳以上の男女ならば、「援助交際」という言葉の本来の意味を理解するとともに、「大人の恋愛テクニク」（？）をこの映画から学びたいものだ。

久しぶりに観た日活ロマンポルノのノリ……？

1950年生まれの根岸監督は私と同世代。1974年に日活に入社した彼は、日活ロマンポルノの全盛期を支えた監督の1人。その根岸監督がはじめて渡辺淳一の純愛モノ（？）に挑戦し、秋吉久美子を主演女優に起用したのが、前述の『ひとひらの雪』。この映画もよかったが、『透光の樹』で数回登場する、ハイライトともいべき秋吉久美子と永島敏行との「濡れ場」シーン（この表現がいかにもピタリ！）は、ひと昔前の日活ロマンポルノばり（？）のもので、そりゃもう絶品！ その神髄は「見えそうで見えない」ということだが、これはちょっとやさっとのカメラワークテクニクでできるものではない。やはり、あの検閲（？）の厳しい時代の中で、精一杯のポルノ映画を撮り続けてきた監督たち一流の技と

いうべきものだ。

日活ロマンポルノでは、ベッドシーンの中心はあくまで女優であって、男優はその引き立て役にすぎないのが大原則。したがってこの映画でも、ストーリー展開においては今井郷役の永瀬敏行は大きな役割を果たしているが、ことベッドシーンにおいては圧倒的に秋吉久美子の世界。女優秋吉久美子の裸身とそのあえぎ声がメイン。

これ以上ポルノ小説ばりの評論は書けないが、久しぶりに観た日活ロマンポルノのノリに大感激！ 50歳の秋吉久美子の官能美にあなたもそりゃ釘付けになること請け合いだ。

団塊世代のオッサンたちに超お薦め！

私はこの映画を、7泊8日で行く中国雲南省への旅行の前日である11月27日(土)に観に行った。それも、午前中は韓国映画の『純愛中毒』(02年)を観て、その後事務所で仕事をした後の夕方から観たもの。公開初日に勇んで観に行ったものの、観客は年配者を中心として20名そこそこしかいない。結構前宣伝をやっていたと思うのに、私としては極めて残念だ。同じ日に公開された、イ・ビョンホンとチェ・ジウ主演の韓国映画『誰にでも秘密がある』(04年)には、年配のおばさんたちが列をなして並んでいたのとは対比すると、私としては非常に遺憾！何も、ヨン様やビョンホン様そしてチェ・ジウばかりに夢中にならなくとも、日本にだって、しっとりとした大人の恋愛ドラマがあるじゃないか、と声を大にして叫びたい思いだ。

団塊世代のオッサンたちには、吉永小百合ファンはもちろんだが秋吉久美子ファンも多いはず。そんなオッサンたちは、今や定年を控えて、やれリストラだ、やれ給料カットだ、そして身体のどこそこが悪いなどとグチってばかりいるのかもしれないが、たまには青春時代を思い出してこの映画を観て、「もう一花咲かせてみよう」と思うくらいの元気をとり戻してもらいたいものだ。団塊世代のオッサンたちに超お薦めの作品だ。

2004(平成16)年12月7日記